

## 障害児・障害者の教育と福祉

大久保彰子

菱木 淳一

宮田 樹哉

### 分散会Aグループ

レポートは7本、参加者は12名でした。杉田さんは学校の日課を紹介しながら、特別支援学校の過大・過密化による余裕のない学習環境について報告しました。永武さんと九里さんは、不安定になりやすい生徒の思いを受け止め、生徒本人が行動を選択し実行することによって、心の安定と成長につながっている実践を報告しました。渡邊さんは、小学校の特別支援学級において家庭とどう信頼関係を築くかということ、目標の置き方や実態を交えて報告しました。大久保は、発達障害に関してボーダーにいる生徒への支援体制をどのように作っているか報告しました。山田さんは、小学校から中学校への支援の連携やサポーターチーム

の取り組みについて報告しました。玉島さんは、生徒の困った行動の裏にある思いに光をあて、教師が見落としがちなことや、普段忘れてしまっていることをレポートにまとめました。

特別支援教育は、直面する困った行動をなくすことを目標にするのではなく、子どもたちの心に寄り添い、将来を見据えた発達支援を行うものです。保護者と共感しながら、また数多くの思わぬ失敗から教師自身も学びながら、仲間と協働し実践していくことが大切であると話し合われました。

### 分散会Bグループ

レポート6本、参加者は13名でした。田中さんは、肢体不自由養護学校での実践を通して、子どもの見方に発達の視点を加えることで、指導が変わることを報告しました。皆川さんは、子どもが意欲的に授業に参加するには、どうすれば良いのか？という悩みを語りました。楽しい授業を通して子ども心の動きを作っていく大切さが議論されました。小野島さんは、高等養護学校での進路指導を通して、生徒と共に地域に出て行き、いろいろな経験を積み上げる必要性を強調し、充実して生きる土台作りと環境作りを実

実践していきたいと力強く報告しました。中谷さんは高校での実践を通して、お互いを認め合う集団作りの困難さと大切さを報告しました。議論の最後に中谷さんが言った「どんなに小さくてもいいから、生徒のことをほめていきたい」という言葉がとても印象的でした。

## 分散会Cグループ

参加者は15名、レポートは5本でした。

寄宿舎指導員の熊谷さんは、経験不足からくる自己と社会との関係性や人との距離感がうまくつかめない生徒に対するグループ学習や集団の中で経験しながら成長していく実践の報告を行いました。中学校特別支援学級担任の田中さんは、子どもの実態を把握し、課題を見つけ寄り添いながら解決に向けて取り組む実践や、子どもが課題を意識して自ら取り組めるようになるにはどのようにしたらよいかの疑問を投げかけました。市橋さんからは、肢体不自由養護学校高等部の子どもたちなりの生徒会活動を通して自治の気持ちを育て、社会人として必要な力と人格の形成を願う取り組みについて発表しました。柏さんは、高校から肢体不自由養護学校に異動し、奮闘しながら日々子どもと向き合ってきた実践を報告し、武田さんは、養護学校の分校

の役割や実態の報告と、校内で自主学習会を開催した実践について報告がありました。

今こそ子どもひとりひとりの発達課題に寄り添った支援を計画し行っていくことや、自治の気持ちや社会性を身につけ、心も体もすこやかに成長してほしいと願って取り組みでいくことが大切です。子どもの実態把握や指導の手だてと具体化、子どもに伝わる評価の方法について話し合い深めあうことができました。

(北海道高等聾学校)

(夕張高養)

(小平高養)